

---

# エイプリルフル

蒼山

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エイプリルフール

### 【Nコード】

N1069E

### 【作者名】

蒼山

### 【あらすじ】

バス停で出会った同級生は、その時はもう……。

「あ、小田君……」

「おう、柴崎」

春休み真っ只中の、ある糞ダルい日曜日、何か損した気になる長期休暇中の日曜日のこと。

その日は四月一日、つまりエイプリルフールであった。

誰かに嘘をつく予定など皆無であった。

バス停で偶然にも出会ったのは、中三のときのクラスメイトの柴崎だった。

どちらかといえば目立たない方の女子で、何度かしか喋ったことがなかった。

顔は整っている方だったので、よく告白はされたらしいが。

まあ、本人談ではないが。

と言うか俺も柴崎のことが中二あたりから結構気になっていたのだが。

まあそんなことはどうでもいい。

「これからどつかいくのか？」

黙っていては気まずいので、俺は喋りかけた。

「え、あ、うん。ちょっと……買い物に」

俯き加減で、柴崎は言った。

「買い物か。俺は特に目的はないんだけどな。ただちょっとブラブラしようかなあと思って」

「へえ……」

としか柴崎は返さなかった。

気まずい沈黙だけは避けなければ。

という、なんというかソフトな強迫観念から、俺は喋り続けた。

「お前は何買いに行くんだ？」

「ええっと……それはちょっと……」

まづったか？

いや、沈黙よりはマシだろう……たぶん。  
そうこうしているうちに、バスが来た。

俺と柴崎はそれに乗った。

俺は柴崎に席を譲った。

「ありがとう」

小さくそう言って、柴崎は座った。

なんとなく、こう……優しくしてあげなきゃ！的な気持ちにさせる  
オーラを、柴崎は持っているのだ。

「そっぴゃ、柴崎って×××高だっけ？」

「うん……そうだよ」

柴崎は言った。

そして

「たしか、小田君は××××高だったよね」  
そう続けた。

俺は一瞬、驚いた。

柴崎は会話を展開させるようなことはしない。  
今までそんなことはしたことが無かった。

驚きによる少しの間を置いて、俺は答えた。

「そうだよ。っていうか××××高って××中からの奴あんまい  
ないんだよな。友達作りから始めなきゃなんねえってのが、なんつ  
ーかダルいなあ」

「……そうだね」

「……」

妙に気まずい感じの沈黙が、しばらく続いた。  
そしてその沈黙を破ったのが

「……ねえ」

柴崎だった。

またしても、自発的に会話を展開させるようなことをした。  
そんな柴崎に何か違和感を感じながらも、取り敢えずは会話を続け

た。

「何だ？」

「小田君ってさ、中学のとき好きな人とかいたの？」

意外なことを訊いてきた。

「……………まあ、俺は中二のときからお前のことが結構気になってたんだけどな。」

などと真実を言えるはずもなく、俺は

「いや、別に」

と答えた。

「……………ホント？」

「ホントだって。マジで」

「……………まあ、エイプリルフルだから別に嘘でもいいんだけどね……………その、ちょっと訊いてみたかったの」

だんだん小さくなる声で、柴崎は言った。

「……………そうか、今でも俺は嘘をついたことになるのか。」

そんなことを思ったときだった。

「次は、xxxxxxxxxxxx、xxxxxxxxxxxxでございます」

バス内にアナウンスが流れた。

「あ、ミスった」

予定よりも一つ先のバス停までできてしまったのだ。

「ごめん、俺もう降りないと。一つ先まで来ちゃったみたいだから」

「う、うん。……………それじゃ……………またね。小田君」

「おう、またな」

俺はバスを降りた。

行く予定だった繁華街まで、歩きで行くことにした。  
と、そのときだった。

ケツのポケットで、ケータイが振動した。

家から電話だ。

「もしもし」

「あ、もしもし、お母さんよ！何回かけても出なかったけど、今ど

ここにいるの！xxxxxに行くって言うてたけど、そこにいるの？今そこにいるの？」

「どこって、バス停間違えたから今xxxxxにむかって歩いてるとこ」

俺がそう言つと、母親は

「ああ……よかった」

と言つた。

「何？何かあつたの？」

俺が訊くと、母親はとんでもないことを言つた。

xxxxxで五人、人が殺されたのよ。

あんたの友達の柴崎さんも……刺されたらしくて……。

「……それ、いつ頃のこと？」

「あんたが家出てちやうど五分くらい経ったぐらいのことよ……」

俺が家を出て五分後。

俺がバス停にちやうど着いた頃……。

俺は、何も言えなかった。

後日、柴崎の通夜も葬式も終わってしばらく経ったある日のこと。

俺は柴崎の家族に呼ばれて、柴崎の家へ行った。

そこで、俺は意外なモノを渡された。

「……これは？」

「あの子の部屋を片付けてたら出てきて……あの子、小田君のこと好きだったみたいね」

「……………」

恋文……じゃ、ないか。

俗に言う、と言う言い方も変だが、ラブレター、だった。

「……………」

俺は仏壇に手を合わせ、それから柴崎の家を後にした。



（後書き）

だいぶ久しぶりの投稿です。

どうも、蒼山です。

ジャンルをホラーにするか恋愛にするか迷いました。

なんかもうテキストにやった感バリバリですが、そこは持ち味としてテキストにスルーして下さい。

こんな何の起伏も無い話を書く（打つ）時すらメタルを聴く俺は正常なのか、否か……。

ってゆーか、最近のアニメはおもしろいね。

メタルもいいけど、アニメもいいね。

でもメタルだな。うん。（結局何が言いたかったのか

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1069e/>

---

エイプリルフル

2010年12月10日22時39分発行